黄土の国・桜の国

――日中異同の弁――

衞藤瀋吉

前言

らくに話させて頂いた結果、記録すると全くの会話体のくだけた日本文で、おはずかしい次第です。でもこれをチャンとした文章になおすのは新しく書くより時間をとる作業ですので、講演した時の雰囲気のままのくだけた日本語を残させて頂きました。お許し下さい。

みなさん、今晩は。今日は楽に話をさせていただきます。

初めに、私、自分の体験を簡単に申し上げましょう。そのあと、日本と中国は、もともと同じなんだ、つまり同根、同じ根っこなんだという説と、それから日本と中国は、いろいろ違うんだという説とを、ご紹介いたします。そして、最後に私自身の見解を申し述べさせていただきます。

我々のイメージの中で、中国というと、黄色い土が見渡す限り、無限に続いて行く、山西省あたりの風景を連想いたします。私の生まれ育ちました中国の東北地区、昔の満洲でも、秋が深くなりますと土の色が出てきて、雪がまだ降らない時には、土が黄色、まさに黄土の国でございます。それから、日本は申すまでもなく桜の国で、日本と中国とでお互いにイメージとしては、随分違うわけでございます。私自身も、私の子供の時からのイメージでも随分違うんですね。まだ見ぬ日本のシンボルは、富士山でございまして、小学生の時から、日本のことっていうと、富士山が必ず出てくる。それから、その脇に必ず海があって、白い浜辺が、白い砂の浜辺があって、そこに必ず松がある。まあ、日本から持ってきました安っぽい屏風なんかの絵もそうでございました。小学校の先生がなにか絵を描こうと、絵の時間におっしゃいますと、その時に、先生がお描きになるのが、やっぱり、先生は日本で育っておられますから、日本が恋しくて、そういう富士山の絵など

を描かれる。それからもう一つですね、二見ケ浦の夫婦岩と日の出。ご承知のように、あの夫婦岩の、これは浜辺で二つの岩が夫婦になってる。浜から見ると岩は東ですから、そこからお日さまが出てまいります。あれが絵になって、子供の時から、日本ていうと、夫婦岩、しめ縄が飾ってあって、そこから日の出が出るという、そういうイメージでございまして、満洲とはなんと違う、美しい国だろうということが、頭の中にこびりついておりました。私に兄がおりまして、熊本の旧制五高の山岳部に入っておりましてね。彼は、中国大陸のはげ山に木を植えるのを一生の夢にしておりまして、五高から東大の農学部林学科に入りまして、不幸にして学生時代に亡くなりましたけれども、彼が始終、九州の山に登った話をする。夏休みに帰ってきても、冬休みに帰ってきても、満洲の寒いところでふるえている私達をつかまえては、その冬も凍らないし、熊本とか、鹿児島とか、そういうところの話をいたしまして、その中でですね、非常に印象的だったのは、日本では山に登るのに、水筒がいらないと。どこへ行っても水が飲めるんだということです。我々は中国の、大変乾いたところで育ちましたから、遠足というと必ず水筒を持って、で、水筒、帰りには空になる。すごく乾く。それから、その乾き方は、尋常ではありません。例えば、雪。温度は非常に低いんですけど、雪はほんのちょっとしか降らない。それが春まで消えない。でも、スキーなんか絶対できません。スケートしかできないのです。カラカラに乾いています。でございますので、冬になりますと、寝る時には、濡れ手拭いをいっぱい部屋の中へ掛ける。それから、洗面器に水を一杯入れて、部屋のすみに置く。それでないと、喉をやられるんですね。中国人は平気なんですけど、日本人は喉をやられる。そういうところで、兄貴が帰ってきたらですね、山へ行くと水が豊かでどこでも水が飲める。これは非常な驚異でございました。中国では川というと、濁った水でありまして、よほど山の奥へ行かなければ、きれいな川はなかったものですから。だから夢の国のような、聖書にでてくる葡萄と蜜があふれている砂漠の中のオアシスのような、そんな感じでございました。それで、その水清い祖国の片鱗が鎮江山でした。鴨緑江の出口のところで、今は丹東と呼ばれていて、我々の育った頃、安東と呼ばれていたところがございました。ここは、鴨緑江の河口に近いところで、暖かいですね。山も、小さい山がございます。鎮江山という安東の町の中にある、小高い丘に日本人がいっぱい桜を植えたんです。それが育って、すごくきれいな名所になりましてね、私が子供の時には、春休みになりますと、汽車で四時間か五時間ぐらいかけて、安東まで行きまして、お花見をするというのが、大変楽しみでした。そういうところで育ったわけでございます。

で、現実の奉天では、とにかく山は見えないですね。小学校の屋上に行くとか、天気の良い日にははるか地平線にかすかに起伏が見えるけど、それ以外は、ほとんど山が見えない。そして、咲

く花は、桜ではございません、寒くて。杏はあるんですね。杏は花が桜に似て、そっくりでございますけれども、まばらなんですね。あの鎮江山の桜を、まさに「万朶の桜」と評すれば、杏は、英語で言うと、shabby，みすぼらしい。それだけ違うんだというイメージがございました。それから、大変私の印象に残っているのは、リラ、ライラックですね。ロシア人が持ってきたヨーロッパのリラが、あの奉天で大変はびこりまして、これが五月の初めになると花ひらいて香りました。北海道の札幌と同じで、よく香る。ものすごくよく香る。このライラックは大変私達日本人の子供達にとっても、いい印象残しておりました。このあと幼い頃の思い出話をしてると長くなりますけれどもお許し下さい。

そのライラックの花香る満洲と別れて、内地に移り、戦争に負けてからもう訪れる機会がなくなりました。ライラックの香りっていうものをかがざること二十年。一九六四年日韓の国交正常化の直前に、ソウルに行ったんです。ソウルの朝鮮ホテルというところに泊ったんですけれども、朝鮮ホテルの庭にライラックがありましてね。ちょうど四月の末。四月の末で花が咲いている。香りがしてね。いやー、何十年ぶりにかぐっていうのはね、すごくなつかしかったことを覚えております。

そういうところで育ちましてね。結局は、故郷なき民だという感じがぬぐい得ません。どうしてもあの奉天、その頃奉天と呼んでいた町が、故郷とは思えない。故郷っていうのは、もっと美しいところでなけりゃならないという先入観が、その頃にちょうど旧制中学の三年頃ですかね、できてしまったのです。江口キチという無名の詩人が『武尊のふもと』という歌集を出しておりました。武尊というのは、あの赤城山の近くの武尊ですが、その『武尊のふもと』の中に、「うけ継ぎし流離の血かも、ふるさとに帰るなかれといいしことのは」というのがあります。これはもう、故郷はライラックの香る北国では絶対ない。本当にふるさとがほしいとあこがれながら育ちました。

しかし、いいこともありましたね。あのロシアの革命でたくさんの白系ロシア人が逃げてきて、その中にはユダヤ人もいました。で、父の勤めていた場所で、タイピストでいた若いユダヤ人少女が、それでも二十歳ぐらいですかね、ニーナといいまして、フルネームは覚えておりませんけれども、子供の私を大変可愛がってくれました。日曜など、よくロシア人のお菓子屋、ビクトリヤとか、チューリンとかいうのがありましたが、そういうところへ、連れてってくれては、アイスクリームなどをご馳走してくれました。だから、ユダヤ人に対して、私は全く偏見がない。で、旧制の今駒場の東大教養学部になっています、旧制の一高の寮に入った時に、(ここにそういう方がいらしたら、大変失礼だけれども)高等師範の附属、その頃高師付中っていったかな。高等師範の附属中学を卒業した、東京の山の手で育ってる少年達は、そういうユダヤ人に対する偏見はかなりはげしかったですね、軽蔑したよ

うなことを、時々言うんですね。アインシュタインは「いちく」だからな、などという。「いちく」というのは、私分からなくて、「いちく」ってなんだと言ったら、一と九を足してみろよ、と。それも知らないのか、といった調子です。なるほど「一」と「九」を足すと「じゅう」つまり Jew, ユダヤ人になりますよね。私、憤激しましてね。そういうのが何度か、その東京山の手の秀才の友達との会話の中ででてくる。で、それ以来、私は東京の山の手が大嫌いになりましてね。特に、高等師範の附属中学というと、もう非常な敵意を持つようになりました。長い間、そうでございました。この頃は、ほどけましたけれども。

昔、まだ若い頃に、そういう話を恩師である林健太郎先生にしましたら、そしたら、「そうですかね、そんなに東京の山の手の人達は悪いですかね。ぼく、東京の六中ですがね、府立の六中ってのは、山の手にあるんですがね」。先生からだいぶからかわれたことを覚えております。私はそういう人種偏見は全く知らないままでした。私の裏がイギリス人で、ルシニアンというフランス系の名前ですけれど、イギリス人なんですがね、それが住んでおりまして、そいで、私の家にいた中国人のボーイが、すごい人種偏見なんですね。白人をものすごく嫌がって、そいでルシニアンの家になにかっていうといたずらする。ごみを放り投げて隣の庭に積んだり、そこに双子の子供がいたんですけど、双子の子供を追っかけたり、そういうことをするんですね。で、私の父が、申し訳ないけれど、これはやっぱりクビにせざるをえんだろう、ルシニアン君に気の毒だから、暇をとってもらって帰ってもらおうということで、懇々とあの片言の中国語と日本語とまぜたので、その中国人の少年を諭して、家へ帰ってもらった。それで、代わりのボーイを雇ったというのを幼ごころに覚えておりますけれども、ま、そういう時代だったわけです。

父の大変親しくしているドイツ人の友達で、ワルター・フックスという人がいまして、この人はナチに追われて、流れついたのが中国、瀋陽の当時、満洲医科大学、現在も中国医科大学として残っております。非常に優れた医科大学だったですが、そこのドイツ語の先生をしている。蒙古語が非常によくできて、蒙古史の大家で、戦後はナチが滅んだあとのドイツに戻って、一流の学者になった人ですけれども。そのフックスさんが、土曜、日曜になると家へきて、父と英語でなんかしゃべっている。ビール飲みながら。多分ナチの悪口ですね。父が「あいつ、ナチが嫌いでね。あれじゃ、もうドイツに戻れないよ」と言っておりました。で、そういうことですから、その後、日独伊三国同盟なんかができて、ドイツが非常に日本人の間で人気があった時にも、私はナチというのは悪い政府だったというイメージを拭いえなかったのであります。だから、一方で植民地支配を満洲で日本人はしていたわけでありますけれども、今度は別な意味では、国際的な広い視野を養う面もあった。特に、ユダヤ人に対する偏見がですね、ユダヤ

人を見たこともない昭和十年代の日本人の中で、牢乎として存在する。私は日本に帰ってきて非常にびっくりしたのであります。

それで、実は今年夏、二〇二名の、かつて奉天に住んでいた日本人が瀋陽を訪問しようじゃないかといって、訪問団を組織して、私が団長になって、それで、向こうの市長、副市長以下、大歓迎をしてくれたんですけれども、その時私は団長として挨拶したんですね。このレジュメに書いてある通り「私達は、過去においては瀋陽に住んでいた日本人でありましたが、現在は日本に住んでいる瀋陽人であります」（我們是過去住瀋陽的日本人現在是住日本的瀋陽人）という、一句を入れ、そして、唐の賀知章という人の詩、「少小離家老大回郷音無改鬢毛摧」というのを、この詩、下半句は「児童相見不相識笑問客従何處来」で、「子供の時、家を離れて、年とって帰ってきた。長い間故郷を離れていたのに、故郷の訛は改められずにいるが、びん毛も白くなってしまった。子供が近寄ってきて、のぞき込んで、あなたはどこからきたんですか」という、そういう詩を冒頭に引用しました。さすがに中国人もシーンとして聞いてくれて、感慨に胸が熱くなりました。その前に私は何度か遼寧大学を訪ねてはいるんですけれども。今度二〇二名の日本人と一緒に訪れて、向こうの市長さん達が歓迎してくれた時は、本当、感動的でした。そういう育ち方をしたということを、まずはじめに申し上げておきます。

それで、次の話に入ります。その日本と中国がですね。同じでなければならんと、あるいは同じなんだということは、ある意味では、その文化的には学問の上でも成り立つ。例えば、お箸の文化。お箸の文化というのは、人類の中で、非常にユニークな文化でございまして、お箸を使えるということはすごい。人間としては、高度な文明だと僕は思うんです。鴎外が、ドイツに若くして、ドイツに留学していた頃、フラスコの中に落ちた小さなものを、棒二本を使って、お箸代わりにして摘みあげた。ドイツ人が目を丸くして、ビックリしてたということがございますけれども、我々もアメリカやヨーロッパ、あるいはオーストラリアにおりました時に、お箸を使えるということのために、どれだけ得したか分かりません。その意味で、お箸の文化圏というのは、あきらかに成り立つのでございます。それから、我々の文化の中には、日本の文化の中には、中国の古典がもう全く息づいております。死んでなくて息づいている。砂漠を見たこともない私達が、あるいは、私達の祖先が、唐の詩である「葡萄美酒夜光杯　欲飲琵琶馬上催　醉臥沙場君莫笑　古来征戦幾人回」（葡萄の美酒、夜光の杯。飲まんと欲すれば、琵琶馬上に催す。酔うて沙場に臥す、君笑うこと莫かれ。古来、征戦、幾人か回る）というような詩を吟じてはですね、この遙か最果ての戦場のことを頭に描いて、で、中国の漢民族と同じ感懐をもよおす。「朝辭白帝彩雲間　千里江陵一日還　両岸猿聲啼不住　軽舟已過萬重山」（朝に辞す白帝彩雲の

間、千里の江陵一日に還る、両岸の猿声啼いて住まず、軽舟已に過ぐ万重の山)。この、そういうようなもの、本当に頭の中でロマンチシズムの表現として存在する。で、有名な源氏物語の中のエピソード、ご存知の方も多いと思いますけれども、帝が香炉峯の雪やいかにと問いたもうたところ、かしこまってそうろう、といって簾をかかげた、というエピソードがございますが、これは白居易のですね、ここに書きました「日高睡足猶慵起小閣重衾不怕寒　遺愛寺鐘欹枕聴香爐峯雪撥簾看」。この詩が頭の中に入ってなきゃ分からない。この詩は要するに、「日は高く登ったけれども、起きるのにものうい。小さな、ちっぽけな家であるが、布団もたくさん着てるので寒くない。で、遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聞き、香炉峯の雪は簾をかかげてながめる」。その詩があって初めて、この源氏物語のエピソードが理解できる。平安時代にすでに、それほど中国の文化が、日本の中に、日本人の中に定着していたわけでございます。そこから自然に、同文同種論が出てくる。それはまた一つの考え方だろうと思います。

それから十九世紀になりますと、脣歯輔車論という、日中を脣歯輔車とみる議論が非常に盛んになります。特に明治維新前後から盛んになります。脣と歯の関係、ああいう隣あっていて、利害を、運命をともにする。それから輔車というのは、輔というのは上顎、車というのは下顎、でございますが、上顎・下顎との関係ほど密接だという議論でございます。これは私の知っている限り、一番最初に出てきたのは、文久二年に徳川幕府が、二七〇年の鎖国を破って、自ら貿易のため、千歳、千歳空港の千歳ですね、千歳丸という貿易船を上海に出しました。この時に公然と上海に行けるというので、先を争って、各藩から乗せてもらおうとして応募したのでございますが、その中には高杉晋作、若き高杉晋作もおりました。彼は「上海日記」という、記録を残しております。それから五代友厚、明治になって大商人、政商となりました五代友厚も入っております。そういう人たちの中に納富介次郎という無名の武士がおりまして、この人も上海に行った記録を残しているんですが、その中に、中国の人と書くと通じますからね、筆談をした記録が残っています。中国の人が、日本と中国とは、これは脣歯輔車の関係ということを言った、という記録が残っております。多分、そのへんから、日本と中国は運命共同体であるという言い方を、脣歯輔車というふうに表現したのがはじまりだと思います。

それからさらに進みますと、明治の末期、日露戦争に勝ったあとあたりから、日中兄弟論。で、これのさきがけは、日中ではなくて、日韓、日本と朝鮮との関係をですね、兄弟だというふうにみた、堂々たる弁論がございます。それは、自由民権の大井憲太郎が朝鮮での、李朝の大変な虐政ですね、残酷な政治をみて、それを黙ってみておれんということで、爆弾や武器をひそかに集めて、そして朝鮮におし渡って、李朝をひっくりかえそうとした。

そういう計画をしたことがございます。これは未然にもれて、大阪事件と呼ばれて、大変有名な事件でございますが、これでですね、大井憲太郎は逮捕されて、裁判にかけられて。その時に大井憲太郎は、「自分達は自由民権を主張する。それが隣の国で人民がひどい目にあってる。まるでアフリカの野蛮な政治のような、そういう権力によって、惨めな、ひどい目にあってる。それを座視することができるか。日本人と朝鮮人は兄弟ではないか。」そういう堂々たる弁論をして、これは記録に残ってるんです。だから、自分達が国内において自由民権を主張するのと、朝鮮において悪政を倒そうとするのとは、同じ志なのである、こういうふうに主張するわけでございます。で、これが中国について日露戦争のあとからしばしば主張されるようになりまして、典型的なのは、山路愛山の「支那論」という評論集でございまして、その中にはですね、自分達、日本人と中国、支那人と、当時ですから、支那人、支那人は兄弟だと。垣根があってはいけない。そして、心が相通じなきゃならんし、日本人は向こうへ行って自由に活動できるようでなければいかん。とこういう主張をしているのであります。これがですね、やがて、日本人が中国を指導する、シナ人を指導するのも当然だ、と。それから、満洲国を作るのも当然だ。蔣介石が悪い政治をしているなら、それを日本軍がひっくり返すのも当然だ。ということで、やがて、昭和十年代になりますと、暴支膺懲ですね。乱暴なシナをこらす、懲らしめる、というような表現になって出てまいります。

こういうのに対しまして、日中異質論がございます。異質論の中でも、最初に我々の耳目に触れるのは、やはり明治の末、当時の京都帝国大学の東洋史の教授でございました内藤湖南、内藤虎次郎。内藤湖南先生の『支那論』でございまして、それに最も典型的に出てくるのは、その『支那論』をさらに書き改めて、『新支那論』というのを、大正になってから出しておられるわけですけれど。その『新支那論』の序文はですね、実に思いきったことを書いてあるんですね。支那人っていうのは、政治が下手なんです。文化は非常に高い文化を作る能力を持っている。だから、政治は外国人に任せて、都督政治みたいな、外国人がその都督になって支配する。そして、支那人は自分の特技である文化を楽しんだらよかろう。こういう説でございます。実は、私は東京でございますから、しかも二松学舎という中国についての教育では古い伝統がございますので、ここではご遠慮申し上げますけれども、京都ではですね、内藤先生を神様のように尊敬する学者がまだ一杯いますよ。だから京都ではこれ、絶対申しませんからね、東京でだけ。それで、印刷にもしておりません。印刷すると京都の人が読んで、そうすると、あいつけしからん、ということで、僕京都に行けなくなりますから。だから一例だけ申し上げます。これ随分、今から省みると、ひどい議論でございますけれども、しかし、大正の初めには堂々とまかり通った中国論でございます。

それから石田英一郎さんという大変偉い文化人類学者、東大の文化人類学を作り上げた方でございますけれども。この方は随分思いきった議論を展開されまして、『日本文化論』という本の中でですね、文化の断絶は、大きな断絶は朝鮮海峡にある。日本列島は大変ユニークな文化を持ってるんだ、という主張であります。そこで朝鮮半島から西はイギリスまで文化の連続性がある、こういう主張ですね。例にあげられたのが鍵ですね。日本列島は、昔は鍵がなかった。落語の、長屋で鍵がない。もっとむこう、昔、平安朝の建物でも鍵がない。これ、ところが朝鮮半島から西の方は、やたら鍵が多い。それから、日本では障子一枚でプライバシーを守る。朝鮮半島から向こうは、非常に厳重な扉を作って、家の中に境を作る。それから、大陸の文化に接触しました日本人は、宦官の制度だけはいれなかった。しかし、朝鮮半島から西は、イギリスに至るまで宦官が存在した。ご承知ない女子学生なんかが聞いておられるといけませんので、注釈をつけますと、大体子供の時、早ければ赤ちゃんの時おそくても十三・四歳までに、男の性器を手術いたします。トルコまで宦官の習慣は広がっておりまして、それからさらに西の方では、あのボーイソプラノ、いつまでも、あの少年の声を残すために性器の手術をする。ということは、ヨーロッパの王様のいる宮廷では行われていた。日本ではなかった、というのが石田先生、縷々として書いていらっしゃるんですけれども、これ一つの日中異質文化論だろうと、私は思っております。

それから、戦後に評論家として一世を風靡いたしました竹内好さんという方がいらっしゃいますけれども、この方はですね、もともとが東京帝大の中国文学をご卒業なすった方で、この非常に魯迅に私淑なさったのですね、後半生は魯迅の研究で終始したといってもいいぐらいの方でございますが。この方が、魯迅の抵抗感覚、中国人は外部の異質なものに対して、非常にそれを受け入れるとき、抵抗示すけれども、いったん受け入れると、それは本物だと。中国共産党を見ろと。あれ本物だ。日本人はひょこひょこと外部のものを上手に受け入れるけれど、せんぱくがない。短く言えば、そういうご趣旨でございましてね。彼は日本と中国とは、そういう意味では非常に違う、という主張を繰り返してなさいました。それに対して、竹内さんの弟子ともいってよいくらいに親しかった鶴見和子さんという方がいらっしゃいました。この方は、アメリカで教育を受けて、戦後日本で、上智大学の教授をしておられた方でありますけれど、この鶴見和子さんはもっと素朴にですね、どうして日本人は情動としての、殆ど感性と言ってもいいくらいの好奇心を持ってるのかと。これが中国では、その好奇心が見られない。インドでも見られない、という論文を書かれまして、これも又、非常に説得性があります。

時間がございませんので、それぞれについての私のコメントはもう止めまして、一挙に結論に入らせていただきますと、中国は

です、やはり日本とは違う面がある、しかし、似た面もある。それをいくつか、この私の専門である政治の面で申し上げますと、中国では強大な皇帝権、皇帝の権力があって、中央集権となっているように見える。清朝なんかすごい、その強大な権力を、皇帝が持っているように見えるのでありますけれども実は、この権力は、普段は眠ってるんです。それだから、地方にあの官吏が、役人がですね、任命されて行きますでしょう。例えば、両広総督という地方長官は広東と広西両方を支配する。あるいは広東だけを支配する役職に、広東巡撫という役目がある。こういう人達はですね、帝権が眠っている間は殆ど半独立国になるんですね。そして、一定の定められた量の、その穀物なり、銀なりを北京に送れば、あとはなにしようと、半独立。その意味では、江戸時代の藩主と大変似ております。しかし、それが、帝権がいったん目覚めますと、すごい猛威を振るうんです。例えば、あのイギリス東インド会社が十八世紀から十九世紀にかけて、広州で貿易いたします。その時外国人と貿易をすることを許されているのは、あの清国の大変豊かな行商の商人、特許状を持っている行商だけです。その商人達は、もう取引については、殆ど自由自在に、自分なりにできたわけでございますが、ところが、たまにその、こういうふうに言った方がいいですね、たまにその北京の方に、都の方に、法律に違反している、という話が伝わると、そうすると、皇帝の権力が目覚めますね、突然、その商人を重罰に処することがあるんです。

例えば、いくつかあった中で、一つ例をあげますと、その頃は、世界中でお茶ができるのは中国と日本だけだったですね。日本は十八世紀、鎖国ですから、お茶は全く輸出しない。長崎貿易にお茶は出てきてない。しかし中国は広州を通じて、全世界にお茶を輸出している。それの窓口になっていたのが、イギリス東インド会社ですね。中国の商人は、では来年のお茶はこれこれ、これこれの量だけ供給いたしましょう、と口約束する。イギリス人はそれを信用して、それで翌年の春のお茶のシーズン、また来るんです。口約束通りに、お茶が準備されている。これは、イギリスの英語の資料の中で、「中国の商人が一言口で言うと、これは全く信用できる」という記録が残っています。ところが時々、お茶をそれだけ準備できない商人が出てくる。準備できなかった、外国人に対して約束を破ったということが、たまたま北京に伝わるとですね、それだけでもって、巨富をなしている商人が新疆省まで流されてますよ。もう随分でたらめしても、北京は眠っているんですけれども、たまたまばれるとそういう。なんか最近の大蔵省みたいですね。昔からあれやってたと思うんですけれどね。あの防衛庁にしても。ま、そんな点は、大変、あの日本と似ております。

そしてその、帝王、皇帝の権力が目覚めた時も、猛威をふるえなくなった時は、清朝末期でございますけれども、中央の権力が

弱くなっていた。やがて滅んでいく、衰えていく。例えば、日清戦争の時、日本は清国と戦ったつもりでおりますけれど、実際に日本軍と戦った清国の軍隊は広州の軍隊だけですね。海軍だって北洋軍隊でしょ。北洋艦隊でしょ。南洋艦隊っていうのがいたんだけれど、そこ全然動いてないですよ。それから、あの朝鮮半島で日本軍と戦ったのは、北洋軍ですね。南の方にいた連中は、全然動いてないです。それほど、ま、皇帝権力が弱まってきたわけでございます。で、その意味ではですね、中国は一見、強大な帝国のようでありますけれども、大変江戸時代と似ている。地方官というのは、これは一代限りではございますけれども、江戸時代の藩、藩主みたいなものでございまして、統治を中央から請け負わして、請け負わされてる、そういう感じでございます。そうするとですね、目覚めると猛威をふるう、ということでございますので、目覚まさないようにさせておく。これが明哲保身の術。よく物事を見通して、そして身を保つために上手に振る舞うわけでございます。

それから、中央政府の方は、その地方の秩序を知らないと困りますから、そこで密告を奨励する。清朝でも密告が大変大きな役割を果たした。ずっと下がって、文化大革命の時も、中国では密告が公然と行われていた。江戸時代は、江戸幕府はお庭番を始めとするところのスパイ制度を、各藩に情報を取りに入っていく、そういうスパイ制度を、随分張り巡らした。我々の今生きている日本人にはちょっと想像もつかない程に密告制度、スパイ制度は江戸時代は発達していたようで、日本に、幕末に、初代の公使として駐在しておりまして、大変明治維新の、あの薩長が勢力を得るのにあずかって力があった、イギリス公使は、ラドフォード・オールコックと申しますが、このラドフォード・オールコックの『大君の都』、これはあの将軍のことを英語で「大君（タイクーン）」というんですね。タイクーン、大君（おおぎみ）からきたんですが、その*The Capital of Tycoon*という本の中に、江戸幕藩体制のことをですね、「The most elaborate espionage system in the world」、世界中で一番緻密なスパイ制度だ、ということを書いてございますが、イギリス人驚いた。何やそのスパイ制度は。オールコックが何をしても、もう翌日は外国の、外国との交渉、外交監督者知ってる。あきれ果てました。その密告と明哲保身のバランスをとる。そこがあの役人達の、あるいは地方の統治者達の難しいところであったと。

でこれは、それをもう一つ複雑にしているのが、官僚の報酬でございまして、江戸時代の単に禄高だけではなかなか暮らせない。特に幕末になってきて、インフレが激しくなってくると暮らせない。そうすると何か別の収入をはからなけりゃならない。それが役付き手当ですね。それであの子母沢寛の『父子鷹』という、勝小吉、勝安芳のお父さんのことを題材にした小説の中で、甲府勤番、役付きにしてもらおうと思って、任命の権力を握っている、

その旗本の家に朝早くから行って、そこで並ぶ。そういう風景が出てきますけれども、そうやって一所懸命権力握ってる人にお世辞を使い、賄賂を使い、それでやっと役職につくわけです。役職につくと収入がぐっと増える、そういう仕組み。今の役人も、多分にそういうところありますけれども、中国の場合にはですね、これがもっと、江戸時代よりももっと激しくて、月給は、月給というのは収入、表向きの収入は、役人達は本当に少ない。すると到底それじゃ暮らしていけませんから、当然コミッションをとるんですね。賄賂というと言い過ぎなんで、コミッションなしには生きられない。それはその、中飽とか言われてるものでございまして、中飽ってのは、真ん中でこの取り上げるっていう意味なんですね。そしてそのコミッションによって、その高位高官の人は何十人という幕友を持つ。幕友ってのは、昔日本の軍隊の言葉で幕僚っていう、参謀やなんかを幕僚と言いましたけれど、あれと似た言葉であって、身の回りにおって、そして手紙を書き、知恵を授け、そして、その高級官僚を支えるグループ、これを幕友と申しますが、中には、その幕友の中には言葉の通訳も必要なんですね。例えば、林則徐という人が広東に両広総督として派遣される。全然広東語通じないです。通訳が必要なんですね。それも幕友の大変大事な役目。そういう人がズラーッといて、それを養わなきゃならない。養わなきゃならないから、絶対悪いことしなきゃいけない。あの、表向きの給料だけでは偉くなれない。そういう仕組みになっているわけですね。それも大変江戸時代に似ているのであります。だから私はシステムとしての社会の構造は、そんなに中国も日本も違ったもんじゃない。そういうふうに思っております。

ただちょっと違うところがある。ちょっと違うところ、それは何かと申しますと、中国の官僚はですね、公然と市場経済へ参加いたします。だから、権力者はですね、権力を利用いたしまして、それであの富を作り上げる。それも中央に見つからないように、中央の目覚め、中央が目を覚まさない程度においてやる。これは、あの非常に上手に、みんなやってるだろうと思いますね。特に最近は、あの鄧小平体制になりましてから、市場経済が盛んになってきて、それからお給料は非常に低いということになりますと、やっぱり官僚が商売に手を出すということが公然と行われる。五・六年前には、あのもう少し前ですね、七・八年前には海南島で、政府をあげて、自動車のブローカーをやって、これはさすがに中央が目覚めてやっつけましたね。そういうことを清朝時代、随分あった。

その点ですね。中国では教師といえども、これもやっぱり市場経済に参加する。だから学校の先生が、子供達の親から何かもらう、ということは、これは昔も当然であった。清朝時代ですと、科挙の試験に、その試験官になることは巨富をなす。もう一生、自分が科挙でパスさせてやった。自分の科挙でパスさせてやった

連中が貢ぎものを持ってきますからね。それは、もうとてもこたえられない。今も学校の先生は付け届けをもらう。だから、ついこの間、あの中国の雑誌でちょっと見たのですが、あの中学校、高級中学校の先生のところに、あの子供の持ってたって言うんですね。子供のオモチャ、もうありあまってるから、一番良いのがお金だと、というようなことを書いてあるんですね。これが学校の先生。

個人個人がするだけでなく、学校が商売をする。北京大学に行くと、昔は、北京大学もそうです。あの外側はちょっとした大きな垣根になっていて、宅地が随分あったんですよ。そこ今全部、建物になって、にぎにぎしくお店ができていて。それからパテント。教授連中が持っているパテントを、これを大学で上手に利用するだけの事務所もできている。そうすると、惨めなのは、そういうお金儲けの手段を知らない文学部の先生方なんかね、この人達は貧乏。大変貧乏で、彼らにとって唯一の楽しみは、日本に来て、秋葉原へ行って、そして安い、あの電気製品をいっぱい買って、そして国へ帰る。だから、彼らは特に文学部の先生は、日本に来ることを非常にこの、なんていうことを中国人の前では絶対言ってはいけない。いけないけれども、彼らは時々口をすべらせて、イヤイヤもう、あの化学の先生はイイヨナーって。俺は歴史をやったばかりにいかんわ、とこういう話が出ます。学校ぐるみの商売。今はもう、公然と行われている。そこが違う。

日本、日本人はですね、これ、江戸時代の官僚制度の中でですね、やっぱり、月給で暮らすのが正しいんだという思想が養われている。明治になりましてから、権力者、最高権力者の井上馨とかなんとか、ああいう連中は、随分悪いことした。伊藤博文なんかも、行く先々で女を買ってる。だけどですね、中堅幹部以下に対する訓練は非常に厳しかった。全部の役人が管轄の家に訪ねていく時にはお茶以外は飲んじゃいかん、というそういう厳しさがあったんですね。この中級以下の規律、これが非常に違う。で、軍隊でもそうでしょ。太平洋戦争で敗れた過程を見てみると、一番下の兵隊達は勇戦奮闘してるんですよね。世界一の戦いをしている。上の方が戦略を誤りですね、それから、何よりも戦争指導を誤っておりましょ。だから負けたんですよ。兵隊が弱かったんじゃない。上の方が間違っていた。これは、あの今でもあてはまると思うんですね。権力を握っている上の方の人だけは、何やってるかわからんですよ。だけど下の方は、真面目ですよね、比較的。我々日本の庶民や下級官僚は真面目なんです。そういう、そこが中国と日本の違い。その discipline, 下級・中級、下級の人達が、自分の職責を全うし、そして収入だけで、公然たる収入だけで暮らそうという、その discipline がどこから出てきたか、これ非常に興味がある。私の小学校教育、明治の小学校の教育は違ったと思います。その残映が今でも残っているんだ、と思っておりますけれども、分からんですね。

しかし、綱紀、日本では規律を守る、ということがまだ意味がある。善悪の中で、善になってる。中国の場合には、官僚っていうのには、一つの商売、ビジネスになってる。官僚企業体という言葉は、平瀬己之吉先生という偉い学者が作った言葉ですが、まさに官僚が一種のエンタープライジング、企業になってる。だから中央が規律を守らせようとする。で官僚自身は、自分の権力を利用して、いろんなことをしようとする、金儲けを含めて。それのせめぎあい。中国の将来を占うのはこれですね。官僚企業体の力が勝ったら、中国はどんどん腐敗していって駄目になる。だけど綱紀が勝ったら、中国は将来大変な国になる。これは私の見方ですね。

日本の場合には、幸いにですね、高級官僚や代議士は時々悪いことするし、大いに悪いことするけれども、しかし我々庶民がしっかりしている。だってそうでしょ、皆さんの中、大抵月給取りでしょ。月給取りは確実に税金取られるんです。そうして、お給料決して高くないでしょ。高い人いたら、今こんなとこに来ない。月給の安い人がですね、勉強しようと思って来るんですよ。だから日本は、そういう規律、社会規律を誇るべきであるし、これを崩すべきでない。じゃあ、どこで崩れるかというと、教育で、教育が崩れると規律や秩序が崩れてくる。そう思ってますから、私、一所懸命、もう教師の身分に甘んじてるんですね。それが日中の非常に違うところだというふうに考えております。

じゃあ、何故中国人は、中国共産党のもとで大きな仕事したのだろうと、皆さん質問をなさるだろうと思いますけれど、これははっきりしてます。密告です。完全な密告制度ですよ。例えば、ゲリラ部隊が農村の村に入って来るでしょ。そして俺達が来たことを言うなよと。それで政府の軍隊が来て、その軍隊に密告した青年がいたとしますね。そうしたら、その青年は夜、ゲリラ部隊が村に帰ってきて、必ず処刑する。私は南ベトナムで、ゲリラのそういうすごい夜の処刑の仕方というのを話聞かされて。それから、あの実際にそうやって処刑されたバラバラにされた死体を見て、いや、こりゃすごいと思ったですね。もう密告とか、それからその、ゲリラが密告するなということを、すごいせめぎあい。それで密告が、密告したら大変だ、ということになって、それで規律が保たれる。逆に、文化大革命のような時に、親のことを子供が密告しますからね。親は家庭の中でも、心を許すことができない。それでもって、ある規律、新しい運動を作り上げていったんです。ま、そういうふうに、非常に単純化しますと、そういうことだろうと思っております。

え、ここでもう時間がきましたので、お話を終わりにしたいと思います。今日はありがとうございました。